



季節を知ったら
暮らしが楽しくなった

（第二七五号）

小満 五月二十一日

鹿島の伊勢神社

内宮のご祭神、天照大神をまつる神社が全国各地にあります。神明神社や伊勢神社と呼ばれ、私は旅先で見つけてはここにも祀られていると、感心することしばしばです。

先日、茨城県の鹿島神社でも伊勢神社を見つけました。小さなお社ながら、代々鹿島神宮の宮司を務める鹿島家の立派な門の傍らにありました。鹿島のご祭神は武甕槌大神ですから、なぜ天照大神を自宅の門前にまつるのか、不思議に思い、神職に尋ねてみました。

「神宮大宮司を拝命した鹿島則文が辞職し、こちらに帰郷する際に、ご分霊をいただき、まつったものです」

鹿島則文氏は、明治十七年（一八八四）に着任した大宮司。神宮御園の開設などで、名前は存じていました。鹿島大宮司について少し調べてみると、第五十六回式年遷宮（明治二十二年）を最高責任者として執り行ったのをはじめ、祭儀の復興、林崎文庫の整備、神宮皇學館（皇學館大学の前身）の開校など、明治四年の神宮改革後の混乱期にあって、さまざまに尽力されたことがわかりました。

そして、不幸にも同三十一年の内宮の火災の責を負い辞職、帰郷されます。火災の際には、正殿にも火の手が迫ったため、別宮の風日祈宮へ御神体を急遽うつしたことが『神宮史年表』に記されています。大宮司として重大な決断もなされたのです。さぞ御心を痛められたのか、帰郷して三年後に六十二歳で亡くなっています。

鹿島大宮司は、おそらく鹿島へ戻ってからも日々伊勢神社へお参りなさったことでしょう。およそ四百キロ離れた地で知った神宮大宮司の御心でした。

文 千種清美



おかげの里便り

おかげ横丁

○ 夏まちまつり

夏が待ち遠しい季節、昔の人々がどのように暑さをしのぎ、夏を楽しんできたかを探り、先人達の夏の過ごし方を一緒に楽しんでいただくお祭りです。

と き／6月8日(金)～10日(日) 10:00～17:30
ところ／おかげ横丁一帯(雨天時は一部中止)

● 夏まち大道芸

バナナの叩き売りやガマの油売りなど、どこか懐かしい和芸を中心に、個性豊かな大道芸人が登場。暑さも忘れる口上をお楽しみください。

と き／6月9日(土)、10日(日) 10:00～17:00
ところ／おかげ横丁内各所

※雨天の場合中止となる場合がございます。 ※9日は時間延長いたします。
<出演予定者> 三ツ沢グッチ(紙芝居)、ももっち(ジャグリング)、
筑豊大介(猿舞)、揚野バンリ(和洋曲芸)、上條充(江戸系あやつり人形)など

● 浴衣のレンタル着付け

お気に入りの浴衣を選んで、素敵な姿で町をそぞろ歩きましょう。
女性用はもちろん、男性用、お子様用もご用意しております。

と き／6月8日(金)～10日(日)
受付時間 10:00～16:00(9日は18:00まで)

料 金／2,900円～
ところ／伊勢路名産味の館2階「大黒ホール」
協 力／(有)すかや呉服店

五十鈴塾

○ 水に流す日本人

山紫水明、自然の風景が美しいことを表した言葉です。山に降った雨が海に出るまで大体2日くらい、川の流れはとても早いのです。

一方大陸では川はゆったりと多くの国を經由して流れます。
人の考え方や暮らしは水環境に大きく左右されてきました。

「水に流す」という言葉ほど日本人的なものはないように思われます。
楔に代表されるように、すべての悪は水に流してしまえばなくなってしまい、何事もなく過ごせるという考え方は周りがすべて海であるからできることでしょう。

これで良いのか悪いのかは議論が分れるところですが、少なくとも神代の時代から2000年この考え方でやってきました。

人間にとってなくてはならない“水の民俗”についてのお話です。

と き／5月29日(火) 18:30～20:00
講 師／神崎 宣武(民俗学者・五十鈴塾塾長)

参加費／一般1,600円 会員1,100円

集 合／五十鈴塾右王舎

※お問い合わせ・お申込み 0596-20-8251

五十鈴茶屋

○ 節気菓子

あおうめ
青梅

刻み梅入りの白鶴ういろうを、外郎生地ういろうで包みました。
爽やかな青梅の香りが嬉しい、五月雨の便りです。

いせなでしこ
伊勢撫子

薄紅色の羊羹をきんとんに仕立て、今が盛りと咲く、
優雅な伊勢撫子に見立てました。

ばな
どんど花

かつて『紫が雲居にたなびく』とも讃えられた齋宮の花菖蒲を、
三色の練りきりで表現しました。